New Landscape with History

新・歴史の見える風景

瓜生保戦死の地（敦賀市樫曲一帯）

金ヶ崎の戦いで南軍に殉じた杣山城主

鎌倉幕府滅亡後の建武の新政は、失政続きで人心は離れ、後醍醐帝と足利尊氏の対立は先鋭化した。建武3年5月25日、尊氏は湊川の戦いで新田義貞・楠木正成を破り京を制圧。後醍醐帝や義貞は比叡山に逃れ立て籠ったが、10月には後醍醐帝は尊氏と講和（降伏）。その後、後醍醐帝は吉野に逃れ12月南朝を起てた。

新田義貞は、講和に際し、後醍醐帝の恒良と尊良両親王を伴い、越前に下り反攻の時を待つことになった。10月上旬（新暦11月下旬）、一行は比叡山を発つも、既に越前守護足利（斯波）高経の軍勢が近江・越前国境を固めており、愛発越えで疋田・敦賀へ入ることは不可能だった。

この年は寒冷な天候で、新田軍は険しい山越えの間道を通らざるをえず、風雪に見舞われ凍死する者、斯波軍の襲撃で討死する者などが続出。13日、新田軍は多くの犠牲を出しながら敦賀に到着し、「無双の要害」で知られる金ヶ崎に籠もるが、斯波高経ら幕府方に取り囲まれた。

義貞はここで兵を募るが、越前で応じる者はなく、越後の新田一族に加勢を求め嫡男義顕を送り出すも、失敗。翌建武4年正月には諸国から動員された幕府軍は城下を埋め尽くし、金ヶ崎は完全孤立状態となった。

杣山城主の瓜生保も、当初は守護高経に従ってこの包囲軍に加わったが、弟達が新田軍に呼応したため、高経のもとを離れ新田方に転じ、杣山に戻り挙兵した。窮地に立つ金ヶ崎城を救うには、幕府方の包囲の一角を崩し物資を搬入することが必須であり、1月11日、保は兄弟や新田の将とあわせて5千の兵で雪の木ノ芽峠を越え葉原まで進出した。幕府方もこれを察知し、樫曲付近に堅固な陣を構え待ち受けた。戦いは葉原～越坂～樫曲一帯で激しく戦われたが、数に勝る幕府方に押され力尽き、裏切りや逃亡も相次ぎ敗北し、保も戦死した。

金ヶ崎の落胆は大きく、2月5日、新田義貞と弟義助は金ヶ崎を脱出し、杣山城にて再度救援を求め、15日義貞を大将に金ヶ崎に向かうも、幕府方に惨敗、金ヶ崎城の命運は尽き、3月落城に追い込まれた。

瓜生保の「戦死之地碑」が建てられている樫曲は木ノ芽道筋にあり、碑は木ノ芽川の右岸に在る。墓も、戦死地の碑から山を少し登ったところに建立されているが、現在はすぐ横を北陸新幹線が通り、往事の雰囲気と大きく変わっている。墓碑は、明治に入って、瓜生氏の末裔で、福井の洋学の先駆者、官界、実業界で活躍した瓜生寅によって建立されたものである。

（文　奥山秀範）

戦死之地碑解説版

裏山にある墓

山上の墓のすぐ側を北陸新幹線が通る

杣山には瓜生保を祀った杣山神社が建立されている